

令和7年度 兵庫県立おこがわ特別支援学校 学校評価

- 1 一人ひとりの障害特性とニーズに基づいた、連続性のある学びの推進
- 2 関係機関との連携を強化し、地域に開かれた信頼される学校づくり

学校経営の重点	①	児童生徒の実態を把握し、個別の指導計画、個別の教育支援計画に基づいた指導
	②	教職員の専門性、授業力の向上
	③	交流及び共同学習の推進
	④	児童生徒の発達段階に応じた人権教育の推進
	⑤	将来の自立と社会参加を見据えたキャリア教育

A	よくできた。十分達成している
B	できた。おおむね達成している
C	あまりできなかった。あまり達成されていない
D	できなかった。ほとんど達成されていない

学部分掌	実践目標	学校経営の重点	具体的な取り組み	評価指標	取り組みの状況	評価グラフ	課題と改善策
学校運営	開かれた学校づくり	③④⑤	学校の情報を家庭や地域社会に発信し、本校の教育活動の理解を進める。近隣の学校との交流及び共同学習や校外での活動を行う。	保護者、関係機関、地域社会への本校の取組等を発信したり、校外での活動を行うことができたか。	ブログで定期的に発信ができています。小学部、高等部は直接の交流ができた。地域の公園や施設を利用することができた。		各学部の様子はブログで発信できているが、ホームページ全体的に見直しをする必要がある。地域の施設等を利用する機会は増えているが、地域の方と一緒にできるような活動へと広げていきたい。
総務管理	安全で充実した教育環境の整備	①⑤	新校舎での新たな生活が始まる中で、各学部や各校務部と連携しながらよりよい環境で教育が受けられるよう環境整備を行う。	新校舎での生活にスムーズに移行できたか。この1年でHR教室や特別教室の環境をより充実したものにできたか。	全職員の協力のおかげでスムーズに引っ越し、その後の環境整備に取り組むことができた。今後もよりよい環境を作るために、都度意見を反映していけるように動いていく。		まだ必要な備品が揃っていないところがあるので、優先順位をつけながら購入してもらい、整備していく。部が増えるため児童生徒の動線の確認が必要である。
	学校とPTAとの連携・協力のより一層の推進	④	PTA組織を見直し、学校と保護者が連携し、学校づくりをしていけるよう推進する。	来年度に向けて新たな組織づくりの土台を作ることができたか。保護者が無理なく、できる範囲での学校づくりに意識を持ってもらうことができたか。	PTA役員と話し合いを進めて、本校の保護者の必要な組織とはということ来年度は上部組織を抜け、新しい組織作りをすることになった。今後も保護者と協力しながら学校作りを行えるように努めていく。		役員への立候補者がいない場合、初のくじでの役員選出となる。新たな組織になり1年目となるので、フォローしながら進めていく必要がある。
	働きやすい環境整備	②	会議日程を工夫し「ノー会議週間」や懇談前の事前打ち合わせ日などを設ける。また仕事が効率よく進められるよう職場の環境整備を行う。	会議を精選し、余裕を持たせた日程を組むことができたか。職員室等、作業しやすいレイアウトの提案や物品を揃えることができたか。	ノー会議デーの徹底と、新たに設けたノー会議週間を実施した。環境面では職員室の動線を考えた上で、必要な物品を揃えたり、話し合いができるスペースを設けたりした。また課題として上がっていた駐輪場では、自転車やバイクが停めやすくなるよう整備した。		来年度は部が増える。会議の持ち方の検討や職員の数も増えるため新たな職員室のレイアウトが必要となる。都度見直しを行い、仕事がしやすい職場環境を目指していく。
教務情報	児童生徒の実態を把握し、個別の指導計画に基づいた指導	①②	教師が、児童生徒の「何ができるようになるのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶか」を日々、言語化できるような仕組みを個別の指導計画作成にあたって導入する。また、個別の指導計画を作成するにあたって「教科マトリクス」を活用して目標を明確にする。	教科マトリクスに基づいて個別の指導計画を作成することができているか。(指導計画の目標・手立ての確認を適宜行い、授業内容や支援方法の改善ができていくか。)	教科マトリクスを前/後期で作成し、参照しながら個別の指導計画の作成ができていく。研究日と絡めた教科に関しては、児童生徒の活動時間を計測し、目標や手立ての確認を適宜実施することができている。支援方法の検討や改善にも役立てることができている。		教科マトリクスをデータで残し、各学年の参考シラバスとして参照できるようにする。どの教科においても、授業実施後の確認を実施する習慣をつけていく必要がある。
	教職員の専門性の向上	①②④⑤	「ポジティブ行動支援」を学校研究として実施し、実態把握や、情報を共有する。年間9回研究日を設定する。実態に合わせた目標、手立てを検討し、記録に基づいて日々の支援方法や授業改善に活かす。自主研修weekを夏季休業中に設定する。	児童生徒の目標を教科マトリクスより選び、支援方法や手立てなどをポジティブな内容で検討することができているか。行動記録やビデオ撮りができているか。専門性の向上を目指して自主研修に参加できたか。	教科マトリクスから目標を選定する意識が持っている。研究日に向けて、授業の記録/ビデオ撮りを実施することができている。明確な手順に沿ってポジティブな内容で研究を進め児童生徒の授業内での学習活動時間や着席時間が増えている。夏季休業中に10講座もの自主研修を設定し実施できた。参加教員からのアンケートの意見も良好であった。		今年度実施した研究の流れを忘れないようにする。具体的なステップを踏み、目標や支援方法/手立てが適切かを検討するという意識をもって授業改善ができるようになる。(各教科) 自主研修weekは次年度も継続して設定したい。
生徒指導	学校生活を安全かつ円滑に進めるために、必要な業務内容を明確にする。	④⑤	今後の生徒数増加に向けて、自力通学やスクールバスに関する業務内容を整備する。	各部署と連携して、今後見据えた業務内容を整備することができたか。	担任や自立支援部等と連携して、スクールバスの車内環境の充実・改善に取り組むことができた。各学部・各学年等と連携して、スクールバスの定時運行に努めることができた。		引き続き乗車時刻及び出発時刻の周知を徹底したい。また、今後関係部署と連携しながら車内環境の安全に努めていきたい。
		④⑤	生活指導課の仕事内容を明確にし、整備すると共にクラブ活動や生徒会活動など高等部運営において必要な業務を行う。	生活指導課の仕事内容を明確にし、整備することができたか(クラブ活動や生徒会活動など高等部運営も含む)。	投票を行い、代表を決める生徒会を立ち上げることができた。高等部の協力を得ながら、充実したクラブ活動を運営することができた。		全校的な場での生徒会委員の活動の場を設ける。学部の協力を得るのか、校務部だけで全て企画運営を行うのか。
		①④⑤	各関係部署と連携し、チームで児童生徒の問題解決に取り組む。	必要に応じて会議を招集し、指導・支援の両輪で児童生徒の問題解決に向き合うことができたか。	問題が生じた時点で早急に会議を招集し、連携を図ることで問題解決に向けて取り組むことができた。		引き続き指導・支援の両輪で問題解決に向けて早期に対応できるようにしていきたい。
進路指導	児童生徒、保護者の進路選択に関する情報の収集、発信、および有益となる機会の提供。	⑤	進路に関する情報収集を行い、「事業所案内」「体験会やオープンキャンパスの案内」「進路だより」や進路説明会などを、ラクメヤ、対面、オンラインなど様々な方法で適宜機会をもうけて情報を発信する。	進路関係の案内やお知らせ、進路説明会、「進路だより」の発行等を通じて、進路に関する情報の発信ができたか。	進路関係の案内、説明会などを適宜実施することができた。案内など、学校からの情報発信により生徒や保護者が参加・体験につなげることができたこともあった。		校内活動の適時の情報発信が課題となった。また、学年通信との内容重複もあり、内容の検討やブログの活用などを模索したい。
		①②⑤	福祉事業所見学会や現場見学などを行い、児童生徒と保護者が将来の進路選択に有益となる機会を提供する。	保護者福祉事業所見学会など、児童生徒と保護者が将来の進路選択に向けて有益となる機会が提供できたか。	保護者の事業所見学会は、昨年度に引き続き3回実施することができ、高等部では実習先の選定につながるケースもあり、一定の成果が見られた。企業の見学や教員の見学機会をもうけ、見分を広げることができた。		見学関係の庶務の効率化は、改良の余地があると感じる。均等な役割分担など、部内で改善策を作っていきたい。
自立支援	校内の支援体制を整え、日頃の情報共有と連携を充実させる。	①②	支援部員と担任は、児童生徒の状況を共有し、より良い支援ができるように実態把握し、関係機関につなぐ。デイサービスとの情報共有シートや関係機関との支援会議、カウンセリング事業や外部講師も活用していく。	担任は、クラス・学年・学部で支援の必要な子どもの情報共有をし、支援の方法を検討する。必要に応じて校務部会や外部講師活用につなげ、支援の方法を検討できたか。	支援部員を中心に各クラスからの情報を収集し、対応が必要な場合は関係機関につなげた。デイサービスとは日頃の引き渡し時や情報共有シートで情報共有することができた。		支援が必要な場合に担任と一緒に検討し、校内のリソース活用(人的調整・環境調整)を迅速に行うようにする。支援の充実を図るため、支援計画に基づいた支援ができるように推進していく。
	(地域との連携の充実) ニーズに応じて特別支援学校のセンター的機能を地域支援につなげる。交流及び共同学習の推進を図る。	②③	特別支援教育の専門性を生かし、地域近隣校への巡回相談や教育相談、研修等に取り組む。居住校交流と学校間交流を深める。	相談内容を通じて実態把握を詳細に行い、相手のニーズに応じて丁寧な対応ができたか。交流活動を通して地域での豊かな関係を育むことができたか。	地域の学校からの巡回相談の要望も増え、連携することができた。学校間交流では各学部が新しい取り組みをすることができた。(本校訪問やビデオ紹介)		地域の市立幼稚園保育園からの巡回相談の依頼はないので、今後は幼保連携として巡回相談についても知らせていく。学校間の交流校との関係もできてきたので、今後の在り方を検討していく。
	自立活動の指導が円滑に行えるように校内の体制を整える。	①②	客観的な発達検査を参考に児童生徒の実態把握や課題設定を行う。実態や課題に合わせた支援ができるように外部講師からのアドバイスを共有して活用したり、教材の工夫を行ったりする。	児童生徒の実態把握や課題設定を担任間で共有できたか。外部講師の助言や教材の工夫が生かされ、実態や課題に合わせた支援ができたか。	年度初めにKIDSやS-M社会能力検査を実施し、担任間で実態把握や課題設定を行った。必要に応じてOT,PT,STの外部講師の指導を支援に反映させた。		発達検査や個別の支援計画、個別の指導計画に基づいて、自立活動の課題を考えはするが、設定された自立活動の授業のルーピングには人数等の問題があり、個々の課題に丁寧に向かうことが難しい。

保健安全	(保健) 児童生徒の健康の保持増進と感染症予防のための環境整備	①④⑤	・安全に定期健康診断を実施し、より正確な結果をもとに、保護者や医療機関との連携を図る。 ・健康診断に向けた事前学習を行う。 ・登校前の健康観察の徹底と手洗いうがい等の保健指導を行う。	・児童生徒に応じた検診方法を把握し、学校医と連携を取りながら検診を実施できたか。 ・毎日の健康観察チェックによる感染状況の把握 ・登校前の健康観察の実施と確認ができたか。 ・学年と連携し保健学習(歯みがき、手洗い等)が実施できたか。	・児童生徒が検診を受けやすいように事前指導の資料作成を行ったり、学校医の協力で検診場所に来れない児童生徒への個別検診を実施することができた。 ・日常の健康観察や家庭との連携で、感染症にかかる児童生徒はいたが、感染拡大を起こすことはなかった。 ・歯みがき指導や性教育等、教材の準備の連携することができた。		来年度、学部が増えることで、健診計画や保健指導の課題はあるが部会を通して学部との連携を取りながら実施できるように計画していきたい。
	(防災) 防災教育を通じて、身を守るために必要な防災意識・防災知識を養う。	②⑤	・年間を通して計画的に防災教育に取り組む、身を守るための避難行動を取れるようにする。 ・学部学年に合わせた事前学習を行う。 ・危機管理マニュアルを職員に配布することで、災害時の対応を即座に取れるようにする。	・児童生徒が災害種・災害場面に応じた避難行動を取れているか。 ・職員が危機管理マニュアルに沿って、各自の役割に応じた行動ができたか。	・今年度は新校舎に移動し、5階建てになったということで新しく洪水避難訓練を加え、洪水、火災、地震の3種類の避難訓練を実施した。訓練の中で災害種に応じた避難行動をとることができた。 ・災害種に応じた避難訓練や職員を対象に不審者対応訓練、引き渡し訓練を実施した。マニュアルに沿って訓練を行うことで、各自役割を理解し、実践することができた。		新校舎で安全に避難するための動線や階段を降りることが困難な児童生徒の避難方法等を引き続き検討していく。マニュアルについても今年度の改善点を来年度、反映していく。
	(食育) 安全安心な給食提供と食育の推進	①④⑤	・食に関する指導の全体計画を作成し、児童生徒の実態や課題をふまえた食の指導を行う。 ・衛生管理を徹底し、旬の食材を使用する等、献立内容の充実を図る。	・「食生活動作の発達等に関するチェック」を活用し個々に目標設定し指導できたか。 ・調理業務委託業者と協力して安全安心な給食提供ができたか。	・「食生活動作の発達等に関するチェック」のチェック項目を精査し、formsを活用して集計を行った。食生活動作に課題のある児童生徒については個別に目標設定し指導している。 ・新校舎に対応した衛生管理マニュアルを作成した。研修会等で衛生管理に関する最新の情報を入手し、衛生管理マニュアルの見直しを随時している。		来年度は幼稚部、高等部生徒、職員の増加により大幅に食数が増える。また、12月までは幼稚部へ校外の給食運搬が必要になるなど変更点が多いので、円滑に給食が実施できるよう検討・調整が必要である。
小学部	児童の基本的な生活習慣を確立するため、保護者や関係機関と連携し、適切な目標設定に基づいた指導や支援ができる。	①②④⑤	・あいさつや身の回りのことが自分でできるようにするため、チェックリストやKIDSなどの各発達検査結果を基に、実態把握をした上で、個に応じた適切な目標設定をする。 ・保護者や関係機関と連携を図り情報を共有し、協力して指導や支援をする。	・チェックリストやKIDSなどの発達検査結果を基に実態把握をし、適切な目標が設定でき、達成に導けたか。 ・日々の連絡帳、個人懇談、支援会議などで、保護者や関係機関と情報共有し、目標や支援、指導について確認ができたか。	・KIDSやチェックリストを確認し、日々の活動の中で実態把握を行い、適切に目標が設定でき、達成に導くことができた。 ・保護者とは連絡帳だけでなく電話でも話し、情報共有がしっかりできた。支援会議等で他機関との連携を図ることができた。		KIDSやチェックリストは確認はするが、活用までに至らず、活用の方法などの検討が必要。ただ、日々の活動の中で実態把握はできており、目標設定はしっかりとできた。
	児童がわかって動け、活動量の多い授業づくりをする。	①②⑤	・授業の始まりと終わりがはっきりわかるよう、児童の代表が前になるとともに、全員が前を向いて注目できるよう支援する。 ・授業の始めに実態に合った授業の流れを提示する。(文字を読むのが難しい児童には写真やイラストで) ・各授業で、前に出て立つ位置を明確化する。 ・主指導とサブの教師が連携できるような略案や話し合いの場を利用し、授業内容を理解しそれぞれの子どものための目標や支援の方法を共有する。 ・楽しく期待感の持てる授業の提供を心がける。	・個々の姿勢を確認しながらあいさつを促せたか。 ・実態に合った授業の流れを提示できたか。 ・毎授業、立つ位置の明確化ができたか。 ・授業ごとに略案や話し合いを通して児童の様子や教材について共通理解をはかり、教師間の連携がとれたか。 ・児童の実態に合わせて内容を吟味し、授業を実施できたか。	・授業の始まりと終わりを意識させることはできた。 ・イラスト等を活用して授業の流れの提示も概ねできたが、授業によっては難しいものもあった。 ・前に出て立つ位置の明確化概ねできた。 ・教師間で連携ができた授業もあれば、難しい授業もあった。 ・クラスの中で毎回反省し、授業の流れ等改善していくことができた。 ・児童の実態に合わせて内容を吟味し、実施することが概ねできた。 ・夏休みに教員間で研修を行うなどして、教員間の意識の底上げができた。		児童の一人ひとりの活躍の時間と、待ち時間との兼ね合いが難しいこともあるが、日々の授業の中で視覚支援を適切に行い、授業の流れをある程度固定化するなど、見通しを持たせるようにしている。個々の教員の授業力向上のため、今後も研修や参考図書を紹介など行っていく。
	生徒個々の社会性を育み、将来の社会的自立に向けた生活習慣の確立を目指す。	①②④⑤	クラス・学年・学部等の単位で、生徒個々に応じた当番・役割を設定し、習慣として自分から取り組めるよう継続的に支援する。	生徒個々の実態を把握し、それぞれの課題や強みに応じた当番・役割等の活動を設定し取り組めたか。	きめ細やかな実態把握に努め、ひとりひとりの課題や強みに応じた当番・役割の活動を設定し、日々の活動として取り組みをすすめている。		係・当番の活動を日々積み重ねることで定着してできるようになり、多くの生徒が役割を意識して自分から取り組めるようになった。
中学部	授業におけるポジティブな支援を通して、児童生徒の学習意欲と行動の質を高める	①②④	授業中の待ち時間を削減し生徒の学習行動を促進するため、教師のポジティブな支援を学部全体で実践し、メディア等を共有する。	個別の指導計画での目標や手立てを設定し、授業全体での生徒のポジティブな行動が増えたか。	学校研究を通して授業について常に振り返り、フィードバックを習慣化することで、授業において生徒のポジティブな行動が増えている。		研究の機会を活用し、フィードバックに基づく調整を細かく行うことで授業での個々の生徒の活動の量が着実に増えた。
	卒業後の就労に向けた態度や意欲を培う教育を行う。	①②④⑤	自らあいさつができる習慣が身につくよう指導・支援する。 生徒の実態把握を確実にすることにより、支援内容・支援方法を工夫し、学校生活のいろいろな場面で生徒の主体的な行動を引き出す。	登下校時のあいさつ、職員室等の入退室時のあいさつ、廊下ですれ違った際のあいさつ等、自らあいさつができるようになったか。 学校生活のいろいろな場面で生徒の主体的な行動をどれだけ引き出すことができたか。	登下校時のあいさつは、教師の姿を見ると自らあいさつできる生徒が増えた。また、言葉だけでなく身振り手振りで行うことができる生徒も増えた。 スケジュールボードや絵カードなどの視覚支援や教師が適切な声かけを行うことにより、教室移動やクラスの係の仕事など生徒の主体的な行動を引き出すことができた。		登下校時のあいさつなど教師の促しによってできる生徒がまだ多くいて、自らあいさつできる生徒は少ない。今後も継続して取り組みたい。
高等部		①②④⑤					一人一人の生徒の実態は様々であり、それぞれの生徒の主体的な行動を引き出す手掛かりを見極め、実践していく取組を継続していきたい。